口腔の役割

温故知新

6 世紀の前半、日本に仏教が伝来し、これに伴い中国の医学も輸入されました。以後、改良され、独自に発展した日本の伝統医学が「漢方」です。江戸時代にオランダから伝来した西洋医学「蘭方（らんぽう）」と区別するために命名されたため、よって中国には「漢方」はありません。

西洋医学の考え方は、身体を機械にとらえて故障した場所や原因を究明し、それを修理あるいは取り去るという考えに立っています。感染症、腫瘍、臓器移植などまさに得意とする分野です。虫歯を削り、歯を抜く歯科治療もこれにあたります。

これに対して漢方は、心と身体は一体のものであるという「心身一如（しんしんいちにょ）」の考えに立っており、体のバランスをとり、自然治癒力を高めて病気を治します。目に見えない生命エネルギー「気」が重要になります。

原因不明の疾患、原因がわかっていても治療法が確立していないもの、副作用で現代医学での治療が難しいもの、心と身体の異常が絡み合っているものなどは漢方の得意とする分野であり、西洋医学にとって不得意分野にもなります。

漢方医学の重要な診断法の一つに「舌診」があります。口を大きく開かせ、無理な力を入れず、自然な形で舌を出してもらい、そしてじっくり観察します。舌の色、萎縮や肥大、歯型が付いていないか、さらに、ヒビや乾燥などから体の血液や水分の状態、熱や冷え、体調、さらに精神やストレスの状態などを読み取ることができます。「舌」は体から実に多くの情報が出されている場所なのです。

他方、これと逆のパターンが西洋医学です。近年、舌と同じ口腔の、虫歯や歯周病を含めた口腔疾患の多くが全身状態に深く関わることを解明し、瞬く間に口腔ケアが普及することとなりました。
後漢の古典「金匱要略（きんきようりゃく）」には「上工（じょうこう）は未病（みびょう）を治（ち）す」とあり、上工は名医にあたりますから、「優れた医師は、症状が出る前の病気を見つけて今のうちに治してしまう」という意味になります。2000 年も前、病気にならないことを考えていた医者が既にいたことになります。

西洋医学と漢方医学は、互いの長所を生かして短所を補う関係にあるほか、相通ずることに気付かされます。

口腔ケアを行うことで全身疾患を予防する、即ち「未病を治す」ことができるのです。

✤ ✤ ✤

東洋の伝統医学の話のついでに幕末・明治を生きた高知県の織田信福（おだのぶよし）＜写真＞を紹介します。長髪に無精髭、着物に襟巻きスタイル、まるで「明治時代のオダギリジョー」とも言えるこの風貌。東京で歯科医学を学んだ後、25 歳で開業。約 130 年続く高知市升形の織田歯科医院初代院長です。同時に民権運動にも関わり高知市議会議長、県議会議員として活躍し、現在は高知市立自由民権記念館でも紹介されています。女性にとても人気があり、同館ではこの写真とツーショットをして帰るのだとか。

土佐の気質と相まってでしょうか、二足のわらじを履く、このような若者が日本を変えようとしていたことに感服します。

＜参考＞

織田歯科医院 HP　http://oda-dental-office.jp/

（織田信福先生の紹介文と本文内容とは関係ありません）

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】